九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジャン・ボダンと近世史

長，壽吉

https://doi.org/10.15017/2335368

出版情報：史淵. 50, pp.1-6, 1951-12-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ジャン・ボダンと近世史

長　壽　吉

ブロアの第二回三部會（一五八八）が、宗教内亂時期に「新體制の政治を生み出さうとする」重要な意味をもつことを、ランケはその『フランス史』第一卷の特に一節に記してゐる。第一回のブロア三部會（一五七六）は、實はこの新體制の構想の端緒である。恰かも優れた法學者にしてトリエント公會議使節またパルルマン議長そして宰相となつたミシェル・ド・ロオピタルが歿した後三年のことである。彼が「政治家黨」（Parti des politiques）の眞の創始者としてサンバルテルミの慘事を經驗し、フラジラン狂信徒その他の混亂に對して、「この恐怖の日の記憶を消し亡せ」と說きながら、憂悶して歿したその反映は、明かにこの第一回ブロア三部會に認められる。そしてジャン・ボダンが堂々と宗教戰爭の非を論じ、宗教信仰に寬容政治をとる立法を論じたのは、この第一回ブロア三部會である。然しこれら先進の言論は、遠い昔のこの熱狂の世態には全く著しい特例として顧みられる。シャルル九世王は年若く苦惱のために歿し、次のアンリ三世は僧ジャック・クレマンに暗殺された。唯ロオピタルの遺志、或は恐らくはボダンの言論は、アンリ四世大王の改宗政治にあとづけられるだけである。ロオピタルの遺作とヴィルマンのその傳記とは未見であるが、その研究は恐らくアンリ四世宗教政策の指針を明かにするものがあらう。ボダンについても同樣であらうが、むしろロオピタルとアンリ四世との關係を主として見るのが妥當であらう。ブロア三部會以前に、ユグノオ攻擊はラ・ロシェル港及びサンセール市包圍で行はれ、慘惡なものであつた。また「神聖同盟」がギイズ侯のもとに組立てられ、「王派と神聖同盟派とユグノオの三者が互に殺し合ふ悲慘と無政府」であゐ（Fr. Gaultier, Leçons d'Histoire）。（Ranke, Franz. Geschichte. Bd. 1.）（Michel de

l'Hôpital, Oeuvres complètes de Paris. 1824) ("Périsse la mémoire de ce jour exécrable") (Premiers états-généraux de Blois, 1576) (Jean Bodin) (Fr. Villemain, Vie de Michel de l'Hôpital) (l'Hospital)

この十六世紀の昔のジャン・ボダンを私の近世史研究の上に記念するのは、ロオピタルの場合とは全く異つた意味の上である(Henri Baudrillart, Jean Bodin et son temps. Par. 1858.)。ロオピタルの業績はナント宗教勅令(一五九八)に照して意味深く觀察されるであらうが、ジャン・ボダンの業績は、私の近世史研究の上に、三百年を隔ててその顯著なまた意味深い提案をのこしてゐたことが、私には回顧される。同時にこの私の回顧もまた一つの提案であり、同好の人の進んだ研究を期待するものである。因みにゲッチンゲン大學論文紀要のうち、アルフレッド・シュミッツ『ジャン・ボダンに於ける國家と教會』に一部分この私の提案の意に關する記述があるが、それはむしろボダン思想の理論研究であつて、彼の文化史上の地位殊に近世史との關係に及んでゐない。(Univ. Göttingen, Abhandlungen Heft. 27: Alfred Schmitz, Staat und Kirche bei Jean Bodin. Lpz. 1939)

ボダンが近代の歴史學或は歴史哲學の發達に先蹤者の地位をもつことは何人も知つてゐることである (Methodus ad Facilem Historiarum Cognitionem, 1566)。この有名な著作を通じて更に一層に勝れた『エプタプロメレス』(Colloquium Heptaplomeres) (七信仰者の會談) を以つて彼が歴史發展に於ける調和 (harmonie spirituelle) を指示むしろ暗示したことの大きさと尊とさとは、彼の篤誠な宗教信念、それは「懷疑主義的」カトリック思想或は「神祕主義」信仰或はまたカリクスト「習合主義」に類した頗る不確定な漠然たるものであつたとしても、「闘爭」などとは比ふべくもない歴史發展の理念を掲げて近世を教へたものであることは疑ない。歴史は調和である。吾等も吾等の先進も、少くも長年月の歴史の考察と研究との後に達するオルガノンにこの調和のボダンを思ふこと切りである。彼は意識してか或は意識せずしてか、この歴史發展の性格を明記し或は說述してはゐない。然しこの性格に沿つて考察された彼の宗教上並びに政治上の所

論が、三百年後の近世史に提案として殘されたことを見るのは、いかにも奇異でありまた運命的でもあり興味深きことと私は思ふ。ドロイゼンはその歴史學原論のうちにボダンとレッシングとを歴史學構成の先哲に數へてゐるが、フュタアはその修史學史のうちにボダンについて餘りに少く述べてゐる。了解し難いことである。(Joh. G. Droysen, Grundriss d. Historik. Ed. Fueter, Geschichte d. neueren Historiographie)

『エプタプロメレス』も『民意國論』(Les Six Livres de la République. 1576)もともにボダンの經驗の結論であることは、一面から知られることで、さきに記したゲッチンゲン大學シュミッツの記していふ通りである。新舊兩派の反目爭擊とこれに關連した政治的國際關係の混亂支離滅裂の間に立つて、この篤信者の苦惱が大著作を生み出し、ブロア三部會の高論を發せしめたことは一應首肯されるところである(Baudrillart)。しかしこの政治哲學者の面目は實は孤獨靜觀の沈思のうちに見出される。彼がラーン(Laon)で歿する(一五九六)(ナント宗教勅令前二年)以前に魔法師と社會を論じたこと(Demonomanie des sorciers)(未見)、しかもこれら言論に對する世評が彼を無神論者とするまでに至つたことは、彼が終始思索の論理に徹底してゐたことを知らしめるものであり、或はカリクスト習合主義及び延いてヤコブ・スペナア敬虔主義の先蹤的思想であつたことをも考へさせる。それは總て一貫した調和の思想に統合される。調和は spirituelle が temporelle に通じ、宗教的にも表現され、更に政治的にも表現される。宗教家としてのボダンは同時に政治論者としてのボダンであり、宗教的政治思想、政治的宗教思想、或は存在の大きな溶合、國家の更に社會の不可缺な理由でもある。『エプタプロメレス』は同時に『民意國論』ともなるのである。

彼が『エプタプロメレス』のうちに描いたものは、樣々に異つた信教のむしろ形式の上のものが、その各々に於ける基本的な(fundatus)ものと考へられる一つの眞理(veritas)に到達する過程である。この基本的眞理に於て『エプタプロメレス』は一致する。そこに和會と同調とが生ずる。然し彼はその眞理の何たるかを知らうとするのでなく、(Montaigne, vérité

métaphysique; Calvin, unio mystica) 基本に向つての努力、それは決して宗教的自由寛容の如きむしろ臨機的な受動(passivité, De la République, Ⅲ.)と解釋すべきものでなく、實に大道を歩む精神である。『エプタプロメレス』を單に信教抗爭の形勢に對する自由寛容の教示と見るのは、歴史論に於ける彼の歴史認識の根元としての調和一體の觀念の主張を省みざるものに等しい。『エプタプロメレス』(一八〇〇年代にはじめて知られた)と『歴史論』(Methodus) (一五六六) との著作年時の考證如何に關せず、一貫せるボダンの思想は、一は物語りとなり一は論理となつて、時代の紛亂事に超越してゐたのである。

ボダンの理想は完全圓滿な信教的世俗國即ち信教も世俗に資し世俗も信教に献ずる一體の上にある。彼の生涯と業績とは一にこの理想に盡されてある。信教分裂の事態は既定事實として彼も亦認めてゐたところであつたとは言へ、それを所謂受動に於て自由寛容するにあきたらずして、能動とも言ふべき大道に於て信教世俗的渾一、それは彼にとりて當然にキリスト教的なものでありしかも基本的眞理を以つて無礙融通するものであつたと考へられるが、その信教的渾一にして同時に世俗的渾一に到達しやうとする。彼は『エプタプロメレス』の賢明暢達な信教者と、多衆信教即ち何等かの信教團體(corps et colleges, De la République)、そしてたまたま國民一般の信教に反するもの(contraire de la pluspart d'iceluy, ibid.) との區別を見てゐるが、結局は後者もまた前者の如くなるべしと考へてゐるのである。

自由寛容の所謂「受動」はこれを達成しうる大道ではなくその途上であり、ボダンの意のあるところではない。『民意國論』に彼が異端者に對する君主の寛容政治を勸説し力の强制を戒しめてゐるのは、それがたゞ自由寛容論が多く文藝復興期に見えてゐる類のものではなく、歴史論と七信論から一貫する思想に據るものと見なければならない。そして勿論かのフロレンスの君主論者のサルカスムスとは緣遠い誠實な信教の高いところにあるもので、決してプロファンなものではない。

『エプタプロメレス』の終りは即ちそれを一貫した性格と傾向との要點は、ボダンにとりて「その後の世界では人々は互に驚くべきまた尊き同意と和合のうちに生活した。何の論議もそこには宗教事情に關して起らなかつた」ことである(Heptaplomeres)。彼はこれを古代キリスト教の調和に比して强調してゐる(non est religionis cogere, quae sponte suscipi debet, non vi.)。眞の宗教の探求は總ての對立と差違とを超越して、キリスト教の聖寵もマホメット教の天惠もユダヤ教の啓示も、皆悉く調和されたる絶對眞理のうちに統合される。スペナアが多樣のうちの一樣(Einheit in Vielheit)を說いたものよりは、それは一層に溶和し流通し無碍化した理想境である。ボダンは歷史の認識に關する可能にして最高の明確性をもつところの、教養ある個性の無垢透明の宗教性を記してゐるが(Methodus ad F. H. C.)、これはつまり『エプタプロメレス』の終局の理想境と相通ずるもので、即ち彼の調和の精神に由るものに外ならない。決して便宜的な現實即應の打算の考量であると考へてはならない。若し『エプタプロメレス』と歷史論よりは頗る現實的具象的な『民意國論』について、彼の所說が當時の宗教的政治事態に應じた便宜上のものであるやうに觀るならば、それは正に彼の眞實の靜觀沈思に出た理想の調和一體を見のがしてゐるものと言ふことが出來る。民意國の調和は「宗派がそれを鎭壓するに不可能であり或は困難であるほどに强大であるとも、もし國家に害を與へ或は危險でなければ、達成することが出來る。この場合君公にとり最も望ましきことは、賢い航海者の如く、嵐の中を進んで巧みに風をさけつつ、全く救ひ得ぬすべての難破をひき起さぬことである」(De la République: "Il se peut faire aussi, que les colleges des sectes sont si puissants, qu'il seroit impossible ou bien difficile de les ruiner, si non au peril et danger de l'estat. En ce cas les plus advisez Prince ont accoustumé de faire comme des sages pilotes, qui se laschent aller a la tempeste, sachent bien que la résistance qu'ils feroient, seroit cause d'un naufrage universel.)。

この『民意國論』の一節は(民意國論第三書)、ユグノオ對策について國家の安寧秩序を維持する目的を以つて有用的(プ

ラグマティク)に說いたものであり、またユグノオ壓迫を非とする寬容政策を述べたのであると見られるかも知れない。然しボダンの意は明確に『エプタプロメレス』を一貫する完全な調和であつて、決して單なる寬容政策の說明ではなく、また猶さらに將來を期待する暫定の意見ではない。ロオピタル宰相をはじめとしてカトリックとプロテスタントとを一緒にした政治家黨の政治意見は、目前の慘澹たる混亂に對處するための、信敎の寬容また信敎に基く政權の寬容を明かにし、たしかに當時の反目憎惡の無秩序を救はうとする意見即ち時代に先だつ意見であつたが、そのうちにはロオピタルの如く既成の事實を眼前に認めて或は將來をガリカニスムまたはカトリシスムの統一に期待したと考へられるものもあれば、他にはやむを得ざる一時の平靜を單に希望したものもあつたと思はれる。ロオピタルの政策の意味は實に將來の期待に存在したのである(Fr. Gaultier, Leçons d'Histoire)。アンリ四世大王の政策またこの範圍を出なかつたことは、ナント宗敎勅令に附帶した條件がユグノオ信敎地の限定をもつたことに參照される。さきに述べたロオピタルとアンリ四世との關係の上の私の考は、これに因んだものである。然るに無神論者としてボダンが當時人に非難されるほど、ボダンは時流の一般を超越してゐたのである。故に彼の意見は宗敎信仰上の自由寬容を超越し、宗敎政治上の政治的自由寬容を超越した理想の調和に存在した。勞作である歷史論も、大著である民意國論も、ボダンを知る上には、實に『エプタプロメレス』に及ばざる第二位のものであると言へるであらう。ジヤン・ボダンの篤信な宗敎家たる姿も、誠實な理論家たる姿も、更に純眞な理想の人たるその姿もこの名著『エプタプロメレス』に浮び出るのである。彼が文化史上の特異の地位はこゝにこそ見出される。そして三百年を隔てた近世に、彼の業績の意味を考へ得ることもこれにある。さて近世に於ける彼の遺業は、政敎分離の氣運に、また近世ローマ問題解決の動向に、彼がその思想の廣い扉を開いたことである。彼が開いた扉は分離でもなく寬容でもなく、實に調和一體のそれである。彼とモンテーニュ、彼とモーアとの關係、彼に繼ぐ後世の連繫については、ここに記述する餘白がない。(Jean Bodin, né à Angers, 1530—m. à Laon, l'Aisne, 1596.)　(十月二十五日)

Jean Bodin et le temps moderne

par Dr. Hisayoshi Choh

Michel de l'Hôpital, l'illustre homme d'Etat du 16e siècle, était le célèbre Conseiller au roi Charles IX et au Parlement de Paris de la poltique tolérante pour les Huguenots. Trois ans après sa mort, en 1576, Jean Bodin (1530—1596) avait adressé aux premiers état-généraux de Blois, sa discussion d'un projet de loi sur la tolération religieuse. L'un et l'autre, membres du "Parti des politiques", avaient la même opinion constante, distingué parmi les politiciens et les savants contemporains, notamment sur la relation des affaires politics-réligieuse. Mais, Bodin était seule, qui surpasse tout les membres du Parlement de sa théorie et de sa idée, parcequ'il était ni un adversaire de politique d'intolérance ou ni un homme qui accepte convenablement de fait accompli. On aurait connaitre qu'il était tout à fait un "philosophe" plein de l'idée de Harmonie spirituelle, si l'on aurait remarquer sincèrement sur tout ce que ce honnête ecrivain voulait dire de ses oeuvras, "Méthodus" et "De la République", surtout de sa "Colloquium Heptāplomeres". Ainsi donc, Jean Badin est le precépteur classique de l'idée de l'harmonie, non seulement une tolérance mais l'harmonie, il y a trois cent ans, de la théorie de Dé-établissement et de la conclusion de la Question romane de l'Europe moderne.